会報

No. 29

平成4年12月15日

京都府図書館等連絡協議会

事務局
京都市左京区岡崎成勝寺町9
京都府立図書館内
TEL(075)771－0069

わたしと図書館

京セラ株式会社
取締役会長
稲盛和夫

わたしの高校時代は、昭和二十四年から二十六年、つまり大平洋戦争後まだ数年しかたっていないときで、九州の一番南の鹿児島の街も九十九パーセント焼ケ野原になったままでした。印刷工場を営んでいたわたしの家も戦災で灰燼に帰しており、大家族であったわが家は貧困のどん底に突き落とされていました。そうした中での高校生活でしたので、わたしも家計を少しでも助けるためにと、アルバイトに精を出す日々でした。

しかし、高校二年の後半からどうしても大学に進学したいと考え、放課後は行商のアルバイトをしながら、夜は受験勉強のために鹿児島県立図書館に毎日通いはじめました。わが家は狭く兄弟も多くて勉強する場所がありませんし、また何より当時は買いたくても本がなかったのです。こうして図書館で自分が必要とする本を借り、夜遅く閉館するまで勉強しました。

阪大医学部を希望しながら落ちたあと、鹿児島大学工学部に入学しましたが、大学に入ってもやはり勉強部屋がないわたしは、学校のかえり、高校時代と同じように図書館で勉強しました。大学時代の方が図書館の利用価値はうんと高かったような気がします。静寂で勉強する環境が整い、大学でも容易に手に入らない貴重な文献や書物等が自由に引き出せるということがあったために、あたかも家にたくさんの本をもって自由に勉強できるのと同じように、大変便利に利用させていただきました。

高校入学当初、卒業後は地方の銀行員にでもなろうと思っていたわたしが、大学を卒業することができ、今日の仕事に至っているのは、あの鹿児島県立図書館のおかげであると思っています。

貧乏でしかも向学心に燃えた子供にとっては、図書館はたいへん貴重なものです。けっして子供ばかりではないはずです。社会人になってからでも、図書館はその人の知的向上心を満足させ、また人間として成長していくために大きな影響を及ぼすとわたしは思っています。

数年前、わたしは米国ワシントンのカーネギー・インスティテューションの理事に推挙されました。バイオ、天文、物理、その他基礎的な科学の世界ですばらしい研究を行っている研究機関です。このカーネギー・インスティテューションをはじめ、有名なカーネギー・メロン大学やカーネギー・ホールを設立した十九世紀の終りから二十世紀初めにかけて米国の鉄鋼王といわれたアンドリュー・カーネギーですが、彼は貧しいスコットランド移民で、学校をでていなかったので、給仕をしながら図書館で勉強し、やがてあのカーネギー財閥を築き上げていった立志伝中の人でした。そのような生い立ちをもっているカーネギーは、自分と同じような境遇の青年に勉学と向上の機会を与えるために、世界各地にりっぱな図書館を寄付したそうです。わたしは理事就任を引き受けるためにワシントンを訪問したときにそのことを聞き、わたし自身も公的な図書館でお世話になったことを思い出して、たいへん感銘したことを記憶しています。

日本の各地にあるそれぞれの図書館が現にそういうすばらしい青少年を育てておられること、また、今後世界の中に伸びていく新しい日本人を育てていきますのに地味ながら社会の礎としてさらに大きな貢献を果していかれることを心から期待しています。

フォーラム くらしと図書館
京都図書館大会開かる

秋の読書週間初日の十月二十七日日本図書館協会創立百周年記念京都図書館大会「フォーラム くらしと図書館」が京都市のルネサンスホールで開催された。

京都では初めての館種を越えた図書館大会に、百六十三名が参加した。

大会は、村上敏明・京都市向島図書館長の総合司会で進められ、図書館活動の現状と課題、これからの活動の進め方などについて熱心な話し合いが行われた。

基調講演で塩見昇・大阪教育大教授は、「図書館が身近にあるということは暮らしの豊かさにつながる。」と話し、図書館組織の拡張ということで、館種を越えた連携と協力によるネットワーク形成の必要性が強調された。

続くフォーラムでは、六人のパネラーがそれぞれの立場で図書館との関わりや課題を報告、意見交換した。

大会に続く懇親会にも八十一名が参加、司書資格要件拡大についての問題提起がなされるなど、図書館を取り巻く状況に対する取り組みが館種を越えて前向きに話し合われた。

主催者挨拶

京都図書館大会実行委員長
京都府図書館等連絡協議会会長
橋本 實

今年は、日本図書館協会創立百周年記念の意義ある年であり、その協賛事業として、京都ではじめて館種を越えた図書館大会が開催できますことは、図書館関係者はもとより、利用者の方々にとっても大変意義のある大会になるものと期待をしております。

「くらしと図書館」という大会テーマで基調講演をしていただきます塩見先生をはじめ、パネラーの六名の方々にはご多忙の中にもかかわりませず、快くお引受けいただきましたこと厚くお礼申し上げます。

短い時間ではありますが、図書館をもっと身近に暮らしの中に活用されるよう共に考え交流していただき、二十一世紀を目前にした新たな出発点に致したく願っておりますので、皆様方のお力添えを今後とも宜しくお願い申し上げます。

大会を開催するに当たり、御後援いただきました京都府・京都市教育委員会にお礼を申し上げます。

日本図書館協会常務理事
酒川 玲子

日本図書館協会は、今年の春創立百周年を迎えました。百年という長い歴史的な時間の中でいろいろなことがありましたが、今まで続いてきたということは、会員の皆様のご支援ご協力があったからだと思っています。

そこで、全国の会員の方々と一緒に記念事業をしたいと考え、各県協が研修事業をする時、一定の補助をしようと計画、実行しました。

今、図書館を取り巻く状況は大きく動いているのではないかと思っています。この春には「望ましい基準」が出ました。七月には「生涯学習審議会」から答申が出ました。学校図書館でも『鍵のかかった倉庫からの解放』ということで様々な動きが出てきています。一方、図書館の現場では職員増が一切認められないままに、週休二日が行われ、労働時間の短縮が言われる。逆に、図書館のサービス時間が長くなる中で、労働条件が厳しくなってきています。そういう中で、正規職員以外の臨時的な職員が増えている。しかも、生涯学習社会の中で図書館への期待は高まりつつある。こういうふうに状況が動いている中で私たちはどう対応していこうかということが、大変大きな問題になってきます。まず、日図協としては国へ、国としての図書館政策を出してください、図書館には司書等の専門の職員の配置が必要である、ということを要請しなければなりません。同時に、図書館の側でも図書館員と住民の方々が一緒に考えて、暮らしの中に本当に図書館を位置づけるためにどうしたらよいかということの具体策を立てていく時期に入ってきているのではないかと思います。今回のフォーラムが、確かな手がかりを与えてくださるよう期待しています。

基調講演

「くらしと図書館」

大阪教育大学教授
日本図書館協会常務理事
塩見　昇氏

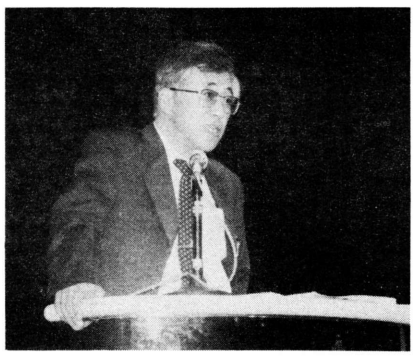
今日は、京都のいろいろな図書館関係の機関団体の皆さんが、京都図書館大会・フォーラムということでこのような形で企画なさったことを私も京都府民の一人として、敬意と感謝の意を表したいと思います。

日本図書館協会は、一八九二年（明治二十五年）に日本文庫協会として設立された。図書館関係者の全国的な組織としては、アメリカ、イギリスに次ぐものだった。初めの頃は実務上の問題解決を課題にしていたが、各地に多くの図書館ができてくるという状況を受けて地方の図書館活動を支援するという組織となり、図書館運動推進組織としての体制を確立していった。

生涯学習が大きく言われる中、今年の二月に総理府が行った「生涯学習に関する世論調査」を通じて、国民が学ぶための施設整備、行政課題としてどういうことを望むかということでは、図書館のことが、最も高い要望内容として上がってきている、ということに示されるように、図書館への期待は確実に強まっている、と言える。同時に大変厳しい状況もある中で、図書館づくり、図書館整備をどう進めていくかが、今日の課題であり協会百年を期しての新しい運動の構築が望まれている。

「図書館は今」という白書を作るに当たってかなり突っ込んだ話し合いをした。

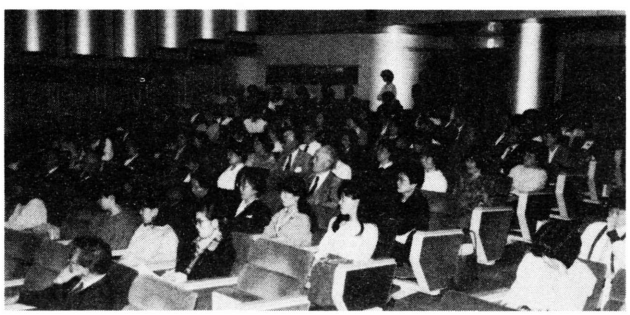
図書館が身近にあるということは暮らしの豊かさにつながるのではないか。経済大国としての日本の力をもってすれば、今の図書館を何倍か質的に、量的にふくらませる位のことはそれほど大した問題では無いのではないか、それに値する事業であるという社会的認識がうまれてくることが必要だろうな、そういうことを促進する白書ができればいいな、と白書づくりの基調に考えた。



図書館に対して人々が持っているイメージに随分格差があるというのは現実の図書館の反映だと思う。図書館が今、どういうものであるか、有り得るのかということを描くこと、そしてそのためには、どんな問題・課題があるのかを白書として明らかにする必要があるということで作業を進めた。

図書館の活用――暮らしに活きる図書館――とは、ということで公立図書館を主に、図書館はどのように使えるか八点ほどあげた。そのひとつ、共有の資料が仲介する人との出会い、語り合い、交流が行われ、地域文化の創造に参画する一例として滋賀県八日市市立図書館の素晴らしい例がある。図書館というのは住民が読みたい、あるいは出会って良かったと思う資料を提供することが基本的な働きである。そのことが相当程度なされた上で、出会い、発展が生れるのである。そこには図書館活動の筋道が必要であろう。

生涯学習とは、人がどの世代においても成長し発達する存在であるということが基礎にある。人は生涯に亘って学び得る存在だということが生涯学習という本来的な根底にある考えである。各ライフサイクルの発達課題に即応する図書館活動というのもこれから考えていかなければならないことである。



施策として推進される時、権利としての公的学びの権利の視点が薄れ勝ちである。学びから新たに疎外される人を決して生んではならない。

一人一人に図書館機能を発見してもらうことを意識的に追求していかなければならない時期である。人は利用を通じて組織性を感じた時感動する。組織的であるということが図書館の最大の特長である。そのことを最大限に生かして人々の暮らしを豊かにすることが図書館事業の課題である。

（抜粋）

フォーラム

コーディネーター
日本図書館協会評議員
若井　勉氏（立命館大学）

澤田　種治氏
八幡市立
八幡市民図書館

京都の公立図書館は最近活動が活発になってきた。この十年で、人口一人当たりの貸出冊数は全国平均を上回り、利用登録も全国で二十四番目から七番目となった。

八幡市の場合は、基本構想の『緑豊かな文化の都市づくり』の一環として市民図書館がつくられた。

大きなサービス目標を三つ掲げたが、これは「市民の図書館」に書かれているサービスの指針を骨とした。

昨年十二月には、八幡市民図書館のサービスを土台にして、更に生活動線の中心にある、下駄履きでも普段着でも行ける図書館という方針で男山市民図書館をつくった。生活居住区の中に図書館をつくるということが利用を高めることになると考える。

福田　優美氏
京都大学
附属図書館

私に与えられたのは、大学図書館の相互利用と地域協力というテーマであるが、大学図書館どうしでは相互利用活動は活発に行われている。学外者の利用については、館内閲覧は事前に連絡しておいて資料が京大にあるという確認が済んでいれば可能である。個人への貸出はしていないが、公共図書館を通じて可能である。

地域協力という点では、大学図書館の性格上、あくまでも大学の教育研究に支障のない程度の協力しかできていない。大学図書館を一般に公開することは、人、資料、施設の問題から難しいと思われる。

田中登茂子氏
京都府学校図書館協議会事務局

京都府学校図書館協議会は、府下の八〇九校にある学校図書館の職員で組織している。主な取組として、「読書感想文コンクール」や「読書感想画コンクール」を実施している。「特色ある学校づくり（一校一品）」として伏見中学校では、「富士登山読書」の取組をしている。読んだ本のページ数を山の高さに例えて、全校生徒が読書目標を十段階に決めて、自分の力に合わせたページ数を読破するものです。問題はいろいろあるが、図書館に目を向けさせ、自主性を持った読書活動を目指すものです。

谷口　栄司氏
網野町
生涯学習センター

網野町で社会教育主事をしている。今年の二月、府立図書館の広域貸出事業を受けて生涯学習センターに図書室を設置した。

図書館が全く無い所では「くらしの中に図書館を」ということは、贅沢なことだと思われている。

図書館を必要とする人がいるということを証明しようと昭和六十三年には「本の国体」を開設したりした。図書館は日常的なものであるということが理事者に理解され、積極的な動きとなった。利用者の声が届いたのだろうと思う。利用者の側から、担当職員を育てて欲しい。

小林　治子氏
京都家庭文庫
地域文庫連絡会

「子ども文庫」活動は、子ども達に豊かな成長をしてほしいと願う母親が中心となった手探りの草の根運動である。出発は図書館の補完的な役割であったが、子どもに本をすすめるために子どもの本を大人（親）が読む中で、本から得られることは大きかった。図書館づくりにも子ども文庫が一定の役割を果たしてきたと思う。

公共図書館に望むことは本と人。児童書は全部揃えてほしい。そして子どもは図書館で本に出会うだけではなく人に出会うのだから、子ども好きな人が児童室にいてほしい。

吉見　昭一氏
京都科学読み物
研究会

図書館の運営は人であると思う。利用者の立場から言うと、図書館人のキャパシティの問題である。

図書館を無縁の建物だと考えている人が、図書館に接点を見い出すためには、いろいろな方法を考えなければならない。図書館を利用することを学習していない利用者が多くいることを先ず知るべきである。

身近な所にそれぞれの地域の特色を活かした図書館をつくることが大切だ。開かれた図書館は生涯学習の基地である。その基地を利用する能力、を利用者に高めてもらうことこそ、ライブラリアンの仕事である。

〔フォーラムより抜粋〕

フォーラム くらしと図書館に参加して

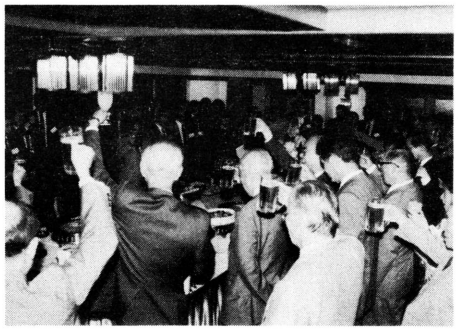
京都市中央図書館
上田 まゆみ

先日ルネサンスホールで開催された「フォーラムくらしと図書館」に参加した。私自身永年住み慣れた学校現場を離れ、公共図書館に勤務することになって半年あまりが経過しようとしている。学校図書館ではいささかの経験があるとはいえ、公共図書館では素人同然。戸惑うことも多く、日常の業務のひとつひとつを覚えるのに四苦八苦の半年であったような気がする。

この時期に、このようなフォーラムに参加する機会を得たことは本当に良かったと思う。ややもすると、日常自分が担当するささやかな仕事の中に埋もれてしまいがちな私にとって、「図書館とは何か」「図書館とはどうあるべきか」という根本的な問題を考える契機となった。塩見先生の講演もしかり。各館種を代表する方々の報告もしかり。すべてが弛緩した私の頭脳への効果的な刺激となった。

学校図書館から公共図書館へかわったとき自分が公共図書館についていかに無知であったかということを改めて実感した。逆に、公共図書館の職員の方々が学校図書館の現状をどこまで理解していただいているかというと、これもまた?マークである。各館種のなかではそれぞれ研究大会も実施されており、先進的な取り組みもなされていよう。また一方それぞれが悩みや課題を抱えているのも事実であろう。百年におよぶ日本の図書館運動の歴史の中で、今こそ、さまざまな図書館が館種をこえて交流・学習を深めるときではないだろうか。そこから日本の図書館の未来が見えてくる。そんな気がした。

時間の関係で、それぞれの報告や討論を十分深めることができなかったのは少々残念ではあったが、今後とも、このような館種をこえた交流・学習の機会が身近なところで、継続的にもたれることを期待したい。



宇治市中央図書館
中澤 美佐子

京都府で図書館にかかわる幅広い人々の集いということで、会場には期待通りの多彩な顔ぶれ、壇上には各分野での第一人者が勢揃いされていて、思わず熱が入ってしまう。

塩見先生の講演の中では、「日常生活の中で人々のくらしに図書館がどのようにかかわっていくか、又、人の一生の折々にどのようにかかわり合えるのか」という課題に考えさせられた。日頃、図書館に親しんでおられる利用者に接しているうちに、つい姿が見えない他の多くの人々の生活や意識を視野に入れた図書館活動を見失いがちであったと痛い思いであった。施設や資料には限りがあるが、人を引き付ける「図書館人」の魅力には無限の可能性がある。図書館は、そんなところにも喜びを見いだせる不思議な場所かな、と勝手に飛躍してひとりで頷いてしまった。

また、小さな図書館であっても図書館組織の拡充により、実は思いがけなく豊富な資料が提供できる大きな図書館でもあるということは、外からは見えないことであるけれど利用者にとっては大切な宝物に違いない。

講演を聞いているうちにだんだん元気が出てくる。次に、フォーラムの開始となる。時間の制約のため、発表される方々には言い尽くせないもどかしさはありながらも、現実に裏打ちされた迫力溢れる内容であった。公共図書館についての八幡市民図書館澤田館長の発言に共感し、網野町図書室の快挙には拍手、児童の読書をめぐっての論議には相互理解と協力の必要性を痛感させられた。

これら提起された諸課題を深めるためにぜひ交流会共々毎年継続して開催していただきたいと、主催者のご苦労に感謝しながらさらに希望するところです。

図書館めぐり

京都市向島図書館

京都市の二大ニュータウンの一つである向島ニュータウンの中にある向島図書館は、十番目の図書館として昭和六十一年三月に開館して以来六年が経過しました。

現在の蔵書数は五万五千冊で平成三年度の利用状況は、一日当り平均貸出冊数は七百冊、貸出者数は三百人となっています。

当館の利用の特徴は、児童（幼児を含む）の利用割合が市内の地域図書館で一番多いことです。しかし、児童対一般は開館当時の七対三に対し、最近では、四対六になってきており、中学生以上の成人の利用の割合が増えてきております。

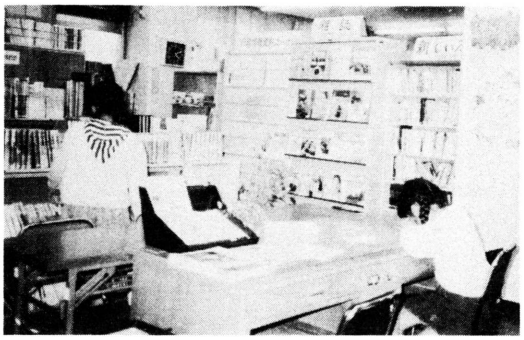
このことは、図書館が地域に親しまれ、市民の関心が図書館に向けられているあらわれと考えています。

新着図書の案内、展示並びに予約・リクエスト制度の紹介などに取組み、利用の促進に努めています。

子どもたちに対して、読書に親しむきっかけとなることを願い、最近は、毎月の読み聞かせなどの「お楽しみ会」とともに、テーマ別の図書の展示、貸出をするなどの各種行事にも力をいれています。

当館のロビーには『えのひろば』として、近隣の幼・保育園児や小中学校児童生徒の絵画作品を常時展示しており、子どもたち、又、親子が話し合う姿で日々にぎわっております。生涯学習の時代を迎え、地域における図書館の果たすべき役割は、大きなものがありますが、市民のニーズをよく見極め、さらに市民に親しまれ、利用される図書館づくりをしていきたいと考えております。

城陽市立図書館



城陽市は南北の中央部に旧奈良街道が走り、昔から五里五里の里と呼ばれ、京都・奈良の中間に位置しています。東部丘陵地は、鴻の巣山運動公園、西部は、時代劇の撮影で有名な流れ橋のかかる木津川が流れています。人口八万五千人のベッドタウンで、今年は市制二十周年を迎えます。

市立図書館は、昭和五十五年に社会教育課管轄の市民図書室から独立しました。

市内には、図書館と五カ所の地域コミセン図書室があり、歩いて利用できる距離に読書施設があります。毎週一回市内連絡車を運行し、資料提供のシステム化に努めています。

蔵書は、全市（コミセン図書室へ配本）で約九万冊、登録率二十二パーセント、貸出冊数約三十万冊です。

図書館は、財産区（鴻の巣会館）の一階で運営しています。

狭いながらも市民の読書熱は高く、明るくクリーンな雰囲気と利用者がまた来館されるような応対に心がけています。

市民の資料要求も幅広く、府立図書館をはじめ他館の協力を得て資料提供をして喜ばれています。

読書推進のためのライブラリー講座は通年開催し、講師は、図書館利用者や地域の活動家、郷土史家などにお願いし、講師も受講者もより身近に図書館に親しんで貰えるように取り組んでいます。

課題は、新しい図書館の建設であり、これまでも多くの図書館のご教示を得て進めてきましたが、今後共ご指導の程よろしくお願いします。

成人ライブラリー　お話入門講座

府内公共図書館との図書相互貸借について

府立総合資料館

総合資料館は、平成四年七月一日から京都府内の公共図書館との間で図書の相互貸借を始めました。

これは、例えば、舞鶴の方が当館の蔵書を利用されたいとき、舞鶴市の図書館で申し込めば取り寄せることができるようになったことで、いわば、当館のサービス窓口を市町村図書館まで延長したイメージで、地元の図書館で当館の蔵書を利用していただいたり、逆に、市町村図書館の蔵書を当館で利用できるサービスです。

図書館間の相互貸借は、図書館サービスとしては、今では当たり前のことですが、これまで当館は調査研究のための施設として、来館利用者への資料提供を優先し、貸出は行っておりませんでした。

このことはそれなりに評価されてきましたが、資料に対する需要が高まるにつれて、一館だけの蔵書では対応しきれなくなってきており、当館の資料提供機能を高める見地から、相互貸借制度に参加することとしました。

これまでに館間貸出で利用された資料は、「日本民俗学体系」「リスト研究」「昭和国民読本」「平城宮木簡」「粉の文化史」「生涯学習と公民館」「園太暦」「孫子の研究」「現代公民館全書」「京の送り火大文字(緑紅叢書)」「正倉院薬物」「渡辺武著作集」「日本毛織六十年史」等で、専門書に対する貸出希望が多く、当館資料がいささかなりとも役立っていることがうかがわれます。始まったばかりで、利用傾向について報告できるほどの実績はまだありませんが、北は舞鶴、亀岡、南は長岡京、八幡、田辺、加茂等の図書館から貸出要望があり、件数では月七件、七冊程度です。当館が貸出することが一般に浸透するにつれて貸出数も徐々に増えていくものと思います。府内の図書館からは、「総合資料館が貸出を始めた意義は大きい」「これまでは他府県の図書館に依頼していたが、今後はまず総合資料館に頼めるので、心強く思っている」などの期待が寄せられています。

当館では、府内の図書館から依頼があれば、館内閲覧と調整しつつ、できる限りの便宜を図りたいと考えています。

なお、原則的に貸し出すことができない資料は、貴重書及びこれに準ずる資料、基本的参考図書(目録・辞典類)、逐次刊行物(雑誌新聞類)、特許広報類、加除式図書、地図などの一枚資料、現物資料(原稿・手紙)、その他取り扱い上配慮を要する資料等ですが、具体的な貸出可否については、当館又はお近くの図書館にお問い合わせください。

ニュース・News

移動図書館車「はまなす文庫」発進

宮津市立図書館

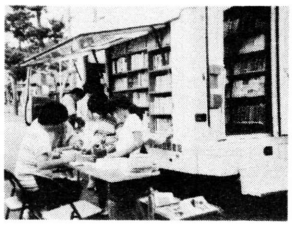
南北に長い地理的条件もあり、図書館から遠くて利用の少なかった地域の人々にも図書館利用の機会を提供し、生涯学習活動に必要な図書や、資料・情報に対する要望に応えることが出来るようにと、約一五〇〇冊積載の移動図書館車の購入がようやく実現し運行を始めました。移動図書館車の愛称に、初夏になると天橋立に可憐な花を咲かせる〝ハマナス〟をイメージして応募された「はまなす文庫」が決まり、毎週水曜・土曜の午後、市内周辺十八箇所にサービスポイントを設定して巡回しております。

各ステーションを一巡して、貸出冊数約七〇〇冊、利用者が約二〇三人という状況です。

地域にて差があるものの、遠くて本館までなかなか足の向かなかった住民の皆さんに大変喜んでもらい、移動図書館車に対する関心の深さと、読書熱の高さを伺い知ることができ、非常に嬉しく良かったと思っています。まだ走りだしたばかりで、日も浅く、今後何かと新しい問題に直面することもあろうかと思いますが、たとえ少数でも熱心な市民のために巡回し、地域の人々の意見や希望を聞きながら、図書館を市民の中にしっかりと位置づけ、子供からお年寄りまで幅広く愛される移動図書館車であり、また、市民みんなの図書館を目標に努力してゆきたいと考えています。

↑「はまなす文庫」

↓貸出風景



専門委員会ニュース

研修会のご案内

研修研究委員会

研修の計画を次のように進めております。近公図の研究集会等日程が集中しますが、いずれも十二月から三月中に開催致します。

1. 児童奉仕
＊ヤングアダルトサービス研究会
＊「子どもの読書離れ・現状と問題」
地域家庭文庫との研修交流会
2. 参考事務　参考事務担当者の実務交流会
3. 図書館事務電算化
図書館の電算化（宇治市中央図書館）研修会
4. 障害者奉仕
＊事業計画案について

① 京都府内図書館における障害者サービスの実態調査アンケートについて

事業計画年度（二年間）で調査し、各図書館における障害者サービスの実施状況を把握することを目的に、調査項目の検討を行いました。

実施計画としてはアンケート調査項目を今年中に作成し、一九九三年四月より六月に配布、回収を行い、まとめる予定です。

② 京都府図書館等職員に対する障害者サービスの実務研修会について

事業計画年度内の単年度計画として「障害者サービス実施先進館等の見学研修会」を全職員を対象として開催する。

候補館に依頼手続を行い調整を進め、実施時期としては一九九三年二～三月の予定です。

府下の図書館の『予約貸出率』

研修研究委員長
村上　敏明
（向島図書館長）

「図書館雑誌」（九二年十月号）に《予約・リクエストサービスの現状》を特集している。自館の「予約貸出率」（予約処理件数÷貸出冊数×一〇〇）を計算してみた。〇・七％は全国平均一・四％、府下平均一・二％に遠い。

コンピューターを使っていないとは言え、その要因を考える。

府下のベスト五
（今年度公共図書館調査による）
①田辺中央（二・七％）
②田辺北部（二・六％）
③宇治中央（二・二％）
④八幡市民（二・二％）
⑤八幡男山（二・一％）

一概にこの数値だけで各図書館の予約・リクエストサービスの現状を判断できないが「フォーラムくらしと図書館」でも強調されていたようにネットワークサービスとも関わり、図書館奉仕の一層の充実のために検討が必要な指標である。又、今後の図書館奉仕をめぐる研究研修の一つの課題でもある。

近公図研究集会日程

◆整理部門研究集会
テーマ
［ネットワーク環境を展望する整理事務のあり方］
―整理システムの現在と未来―
日時　平成五年二月四日（木）
場所　平安会館

◆奉仕部門研究集会
テーマ
［多様化する利用者ニーズにこたえる図書館奉仕］
日時　平成五年一月二十九日（金）
場所　京都市社会教育総合センター

◆参考部門研究集会
テーマ　未定
日　時　平成五年二月十日（水）
場　所　神戸市総合教育センター

広報委員会だより

今号より、「わたしと図書館」というテーマで、各界でご活躍の方に登場していただきます。

京セラ会長の稲盛和夫氏には不躾なお願いにも拘わりませず、ご快諾を頂きまして心より感謝致しております。

「フォーラム・くらしと図書館」には、館種を越えて多くの方々が集まり、大盛会で幕を閉じました。

京都図書館大会実行委員の皆様には、準備から当日のお世話まで大変ご苦労なさったと思います。

基調講演や、フォーラムの抜粋で、大会の様子がいくらかでもお伝えできればと特集を組みました。京都の図書館が支え合ってより大きな図書館サービスができるようこのような研修が継続されればと思います。

図書館に関する情報を連絡協力員までお寄せください。